

初等中等教育における ICTの活用

編集にあたって

豊福 晋平 (国際大学 GLOCOM)

上松恵理子 (武蔵野学院大学)

コンピュータリテラシーのもたらす変化は、読み書きの能力と同じくらい深甚なものになるかもしれないが、この変化は大部分の人にとっては認識しづらく、しかも彼らが理想とする方向にいくとは限らない。たとえば、パーソナル・コンピュータには教育革命を起こす潜在能力があるというだけの理由で、実際にそうなると予測したり、期待したりするべきではない。(Alan Kay¹⁾)

教育における ICT (Information Communication Technology) 活用は、我が国の学校現場にとって長年の課題の1つである。世界的に見てもやや遅れが目立ってきたこの領域の問題に対して、我々はいかに立ち向かうべきか。それが本特集の意図である。

日本の学校教育では、これまで①情報教育、②ICTを活用した分かる授業、および、③校務情報化による効率化と教育活動の質の改善を目指して、モデル事業やガイドラインの整備が進められてきた。文部科学省(2011)「教育の情報化ビジョン」はこれらの政策方針がまとめられた大綱である。同文書では、21世紀の知識基盤社会やグローバル化、OECD: Organisation for Economic Co-operation and Development 経済協力開発機構のキーコンピテンシーに触れつつ、新学習指導要領(2008, 2009)が、確かな学力形成のための基礎的知識・技能の習得、課題解決のための思考力・判断力・表

現力等を育む言語活動の充実、主体的に学習に取り組む態度等を育む必要を求めているとしている。

だが、莫大な事業予算とともに次々と最新の ICT 機器が学校に持ち込まれ、熱心に研究や開発が続けられているにもかかわらず、関係者からは「教育情報化の状況は20年以上何も変わっていない」という話をよく聞く。たとえば、世界経済フォーラムの Global Information Technology Report²⁾では、競争的経済力に寄与する教育システム品質・理数教育品質、学校でのインターネットアクセスの指標が設けられているが、2007～2014年の推移(図-1)を見ると総合順位が16～21位に収まっているのに対し、教育システム品質は127カ国中28位から148カ国中50位へ、学校でのインターネットアクセスも26位から37位へと軒並み順位を下げた。つまり、これらは従前の取り組みが必ずしも上手くいっていないことを端的に表している。

Alan Kayがかつて語った言葉の通り、コンピュータパワーが教育に与えるインパクトの予測や期待はきわめて難しい。最初の目論見通り進まない事象を見直すことはさらに困難である。しかし、厳しい国際競争に晒されている我が国に悠長に構えている余裕はない。我々はどこで道を誤ったのか、なぜ停滞が起きているのか、問題解決に向けて何をすべきか、正面から考え直すことが迫られている。

そこで、本特集としては、まず、日本の学校教

01 日本の学校教育情報化はなぜ停滞するのか—学習者中心 ICT 活用への転換—

02 ICT 教育におけるメディアリテラシー教育

03 教室以外の場面での ICT 活用—「校務の情報化」と「学校広報」—

04 海外における ICT 活用教育—韓国と日本の比較を中心として—

05 情報教育と ICT 活用教育

06 佐賀県武雄市の小学校における ICT 活用教育 **Column**

07 「学び」の場をリデザインする—生徒が主体的に学ぶ ICT システムと教室環境を創る—

08 素人がプログラミング学習環境を作ってみた **Column**

09 子どもの創造的活動と ICT 活用

10 ネットワークコミュニティと ICT 活用教育—子供の自律と成長のために—

11 子どもによるプレゼン大会とプログラミング学習 **Column**

Index

育情報化はなぜ停滞するのか—学習者中心 ICT 活用への転換—

(豊福)にて、我が国の学校教育における ICT 活用の現状と課題について俯瞰し、ICT 教育におけるメディアリテラシー教育(上松)では、メディア・リテラシーの観点から日本の ICT 教育の課題について提起する。その上で、**教室以外の場面での ICT 活用—「校務の情報化」と「学校広報」—**(松本)において、一般的授業外での ICT 活用として校務情報化と学校広報にフォーカスし、**海外における ICT 活用教育—韓国と日本の比較を中心として—**(曹)では、韓国と日本との対比を通じてそれぞれの教育情報化の特徴と課題を明らかにする。また、**情報教育と ICT 活用教育(辰己, 久野)**では、情報教育と ICT 活用教育の違いにふれ、これらの相互作用とともに大人のための情報教育の必要性を説いていく。さらに、「**学び**」の場をリデザインする—**生徒が主体的に学ぶ ICT システムと教室環境を創る—**(小池)は、情報機器環境の更新を機会に生徒が主体的に学ぶ ICT システムと教室環境について論じ、**子どもの創造的活動と ICT 活用(阿部)**は、子どもの創造的活動の視点からの情報環境とプログラミング教育の在り方を述べている。一方、**ネットワークコミュニティと ICT 活用教育—子供の自律と成長のために—**(芳賀, 竹中)では、学校教育にネットワークコミュニティが定着しない理由を考察し、将来像を展望する。

コラムでは最新の実践事例として、**佐賀県武雄市の小学校における ICT 活用教育(中島)**、**素人がプ**

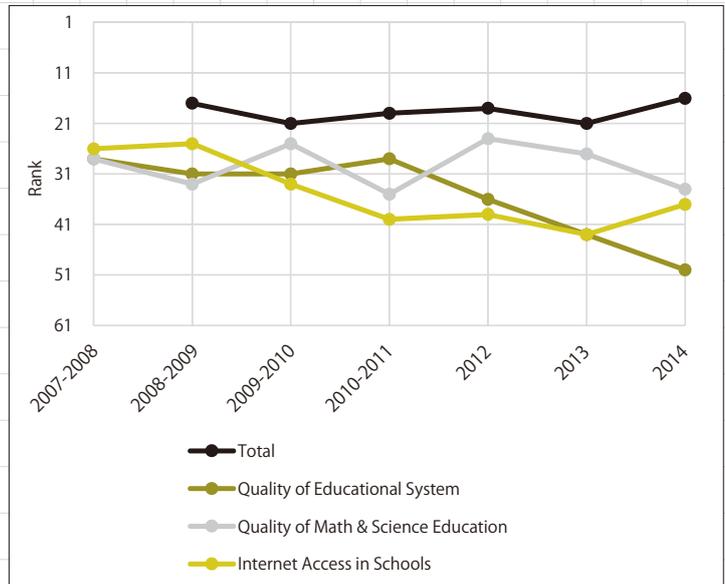


図-1 WEF Global Information Technology Report 2007-2014 における日本順位

ログラミング学習環境を作ってみた(勝沼)および、**子どもによるプレゼン大会とプログラミング学習(齊藤)**を紹介する。

教育情報化の停滞の解消はまさに喫緊の課題であることから、枠組みの捉え直しや問題提起が多く含まれる構成となっている。本特集が社会的議論のきっかけとなるとともに、学習者にとって理想的な ICT 活用がこのような例を通して早急実現されることを願ってやまない。

参考文献

- 1) Alan, K.: Microelectronics and the Personal Computer, SCIENTIFIC AMERICAN, Sep. pp.231-244 (1997), 翻訳, アランケイ, アスキー出版局(1992).
- 2) 世界経済フォーラム, Global Information Technology Report 2014, <http://www.weforum.org/reports/global-information-technology-report-2014>

(2015年1月23日)